

コロナ対策に工夫を凝らし、合唱運動の継続と未来の
運動を創る青年と世代を超えて絆を深める年に

2022年 第55回
日本のうたごえ全国協議会総会

2022年4月9日(土)～10日(日)

大田区立池上会館・港区男女平等参画センターリーブラホール

決 定 集

総会概要	1
はじめに	2
2021年度活動のまとめ	3
① うたごえを創り広げる活動	3
② 合唱発表会運動、地域・分野のうたごえ祭典	4
③ うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」	5
④ 学習・教育活動	7
⑤ 青年のうたごえ	8
⑥ 組織建設連帯活動	9
⑦ 事業・普及活動	9
⑧ 郷土のうたと踊り	10
⑨ 専門家及び他団体との協働連帯活動	10
⑩ 国際交流	11
私たちをとりまく情勢	11
2022年・活動方針	14
おわりに	17
2022年 主な日程・予定	18
2021年 表彰団体・個人一覧	18
2021年 入退会団体一覧	20

日本のうたごえ全国協議会

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-16-36

TEL 03-3200-0106 FAX 03-3200-0193 E-MAIL info@utagoie.gr.jp

総会概要

●参加者 代議員 92人（定数154）、評議員 30人、オブザーバー7人、事務局など 1人 総参加者 130人、○25都道府県、○4産業別、○2中央団体、委任状55通、

●開会挨拶・総会運営体制提案 渡辺享則（評議員・長野）

●総会運営体制

議事運営委員 ○舟橋幹雄（評議員・愛知）、田中嘉治（評議員・自治体）、轟志保子（評議員・東京）、三輪純永（評議員・うたごえ新聞社）、渡辺享則（評議員・長野）、大井かつ江（評議員・東京）
議長団 武藤佳子（評議員・愛知）、小野寺芳子（代議員・大阪）、桑田康徳（代議員・北海道）、佐宗弘雄（代議員・東京）
選挙管理委員 加藤実（代議員・愛知）、飯田智子（代議員・奈良）
資格審査委員 堤龍輔（評議員・福岡）、三觜昭（代議員・京都）
書記団 ○三輪純永、石川道彦
事務局 ○大井かつ江、小澤億和子、杉浦幸子、石垣正人、掛川貞省（奈良・代議員）
プロジェクト担当…河野好行（神奈川・評議員）

●祝電・メッセージ（順不同 19団体）

日本医療労働組合連合会、全日本教職員職員組合、全国福祉保育労働組合、全日本民主医療機関連合会、全国商工団体連合会、全国生活と健康を守る会連合会、日本国民救援会中央本部、日朝協会、明るい革新日本をめざす中央青年学生連絡会議、日本民主青年同盟中央委員会、日本青年団協議会、日本婦人団体連合会、新日本婦人の会、原水爆禁止日本協議会、安保破棄中央実行委員会、日本平和委員会、日本原水

爆被害者団体協議会、文化団体連絡会議、平和・民主・革新の日本をめざす全国の会（革新懇）

●報告・提案

◇2021年度活動のまとめ 三輪純永
◇2022年度活動方針提案 田中嘉治

●討論 発言 37人 通告 37件

●記念講演 志田陽子さん（法学博士・武蔵野美術大学造形学部教授）

●財政報告 うたごえ新聞・三輪純永

季刊「日本のうたごえ」、全国協議会・大井かつ江
会計監査報告・益子ヒロミ

●討論のまとめ 渡辺享則

●採択 代議員定数154人

方針案・まとめ、決算・予算 圧倒的多数で採択

●役員選挙

常任委員会推薦候補にたいし信任投票 全員が圧倒的多数で信任

※選出された新役員

会長・田中嘉治

副会長・轟志保子、舟橋幹雄、三輪純永、渡辺享則

事務局長代行・渡辺享則

事務局次長・大井かつ江

常任委員・朝倉久美子、石川道彦、石垣潔、石垣正人、小澤億和子、

北林亜弓、木村泉、桑田康徳、河野好行、今正秀、斉藤智子、清水

雅美、下温湯義和、杉浦幸子、高田龍治、高島賢、竹澤まみ、土屋美和、堤龍輔、時田裕二、西本好道、藤村記一郎、松木郁子、松永朝恵、間部友哉、武藤佳子、森川恵美子、山本恵造

会計監査・高橋由美、広瀬紀代美

●入・退会承認

●表彰

●新旧役員紹介と挨拶（各々※より挨拶）

新任・※斉藤智子、土屋美和

、（以上常任委員）

退任・※石垣就子、大野文博、小山真理子（以上常任委員）、益子ヒロミ（以上会計監査）

●閉会宣言 議長

第55回

日本のうたごえ全国協議会総会方針

はじめに

被爆75年の一昨年、広島で開催の予定であった日本のうたごえ祭典が1年延期され、2021年12月に2年ぶりに、"2021日本のうたごえ祭典inひろしま"としてコンサート、合唱発表会等を開催することができた。

昨年は、1年のうちに3回も緊急事態宣言が発出されるという異常な事態となり、全国では、多くの団体が練習会場が使えない、団員が集まること自体が難しく練習がもてない等の理由で全国合唱発表会の地域予選を行うことができないところも少なくなかった。

そんなコロナ禍の困難な中、地元・全国の粘り強い奮闘で、祭典は3日間でリアル参加のべ7300人、オンライン配信での視聴者数が約5500人（12月6日現在）が広島に集い、心ひとつにうたごえを響かせ、大成功をおさめることができた。

この2年に及ぶコロナ禍は、世界はもとより、日本が抱える多くの問題点もあらためて浮き彫りにした。コロナの無為無策で批判を浴び、退陣を余儀なくされた菅政権に代わり、登場した岸田政権は、安倍・菅政治の継承という姿勢が明確になったばかりでなく、安倍・菅政権でも成し得なかった新たな危険性も出てきている。（私たちを取り巻く情勢参照）

うたごえ運動は、2023年創立75周年を迎える。

今総会は、2023年運動75周年に向かう運動づくりのなかで、特

2021年度 活動のまとめ

に重要となる三つの大きな柱を軸に総合的な運動方針及び75周年記念事業計画（一部）について論議し、運動がもつ夢と展望、課題と役割などの意見や経験を交流し合い、みんなのものにしていく目的を持って開かれる。

その三つとは。一つは、22年12月愛知で開かれる全国交流会の成功と23年から25年にかけての日本のうたごえ祭典の開催計画を明らかにすること。

二つは、「6人の音楽家による委嘱作品」の作品集（3月出版予定）を全国で運動内外に広く普及し、演奏する場と機会を旺盛につくっていくこと。

三つは、運動発展の根幹を成す組織建設（加盟組織・会員数及びうたごえ新聞読者の拡大）を一気に押し上げる「組織拡大新2カ年計画（2022～23年）」を作成し実践することである。

サークル・合唱団にとつて「人の和」「人間形成」「音楽性向上」の追求は不可欠であり、そこから旺盛な創造・普及活動をはじめとする質の向上と組織建設の拡大をめざすことが日本のうたごえの発展・成長に連なるものである。

コロナ禍のなかでも、集い、歌えた時の感動、コロナ禍の谷間とも言えるひろしま祭典で歌い交わした時の感動、歌う喜び、力が活動の源泉となっている。うたごえ運動の空白をつくらず、社会の真実を描くうたごえを前進させ、今年も1年新しい歴史の扉を開き、新たな道を開いていく。

①うたごえを創り広げる活動

〈方針1〉「9条改憲阻止」、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、コロナ感染防止、菅暴走政権に止めの「6つの止」のたたかいで市民共闘をさらに広げ、憲法のこころを広げる。

〈方針2〉人々の願いと結び「みんなうたごえ」を旺盛に展開し、共に生きる町づくり、地域づくり、職場づくりのうたごえを活発に広げる。

演奏普及活動

「コロナ禍2年、活動制限の中でも「6つの止」、人々の願いを歌でつなぐ演奏普及活動は活発に行われた。

核兵器廃絶へ 国際世論の高まりの中、核兵器禁止条約が発効された1月22日には被爆地広島・長崎はじめ全国で、被爆国日本政府に条約批准を求める署名活動とあわせて普及活動が行われた。8月6日～9日、世界で取り組まれた「平和の波」行動にも参加。大阪のうたごえは「発効記念のつどい」を開催。これら全国の活動はうたごえ新聞で数回にわたって特集。

会員一人5筆を目標に取り組んだ「日本政府に核兵器禁止条約の署名批准を求める」署名は、目標には届かなかったが、大阪の1150筆はじめ全国で4560筆を集め（12月22日現在）、引き続き取り組まれている。

辺野古新基地建設阻止は、大阪の「ちばりよく沖縄合唱団」の創作曲での行動など各地で取り組まれた。

震災復興・原発停止は、東日本大震災・福島原発事故から10年。長野の「3・11を忘れない 春をよぶコンサート」、被災地と交流をつづける富山「大空へ飛べ」のコンサート、埼玉「戸田野の花歌う会」の新日本婦人の会と共同でのスタンディング、大飯原発再稼働阻止・金曜

行動の福井はさよなら原発福井集会、奈良は原発被災者支援のつどいをはじめ取り組まれた。〃愛知子ども幸せと平和を願う合唱団〃は福島ツアーも行い、ミュージカル「バックトゥザ☆フリーちゃんII」を上演した。

憲法をまもり活かす 管政権による憲法蹂躪の日本学術会議会員任命拒否に撤回を求める署名は2084筆を集めた。総選挙で憲法を活かす政府の実現をと歌「そうだ選挙に行こう」は振り付けも紹介し、広められた。

コロナ禍、感染対策による行動制限は練習場など施設利用にも及んだが、行政への対応など全国の経験を交流した。練習やうたう会、うたごえ喫茶はオンライン・リモートも使い交流。震災復興やひろしま祭典成功につなぐ「オンラインうたう会」は4回行われた。

〈コロナ禍 いのちと暮らし 憲法まもれ〉と開かれた第92回リーダー、5・3憲法集会もオンラインとリアルで開かれ、リーダーではメーデー歌、「がんばろう」「人間の歌」などが歌われ、愛知のうたごえは「インターナショナル」をメイン曲として演奏。憲法集会ではオンラインでつないで「HEIWAの鐘」が演奏された。

創作活動

5月の全国創作講習会（福井）は、コロナ禍で当初中止も検討したが、創作活動の歩みを止めたくない、と一昨年からオンラインうたう会などでのノウハウの蓄積から、Zoom開催に踏み切った。Zoomでも「講演は可能」「実作はだめでも作品提出やアドバイスはできる」「参加者も増えるはず」と。事実、方針転換前の「12都道府県30名」から「16都道府県56名、作品提出26名45作品」と大きく増加した。講師の中野哲演さんと水野スウさんの協力と講演の魅力は大きかった。

また、今回、「あれからあの歌は」というネーミングで、5月の講習会で提出された作品や詩をもとに全国からの練り上げ作品を募集。創作部会もアフターケアに取り組んだ結果、27作品ものエントリーがあった。武生センター合唱団では創作経験のほとんどない4人が団員の知恵を借

り、アドバイザーである創作部員ともやりとりをしながら一人1作を仕上げた。

各地での創作発表会も、対面で実施した東京、オンラインで開催した愛知、教育のうたごえで多くの作品が集まり、創作センターに寄せられた作品から優秀作品が選ばれた。

愛知では創作連続講座・作詞編として石黒真知子さんを講師に24人が参加。愛知臨時教員制度の改善を求める会と共同で、教育の現場に取材して20曲余の作品が生まれ、8月の全国臨時教員問題学習交流集会（Zoom開催）で2曲が発表された。また、保育のうたごえは3回のZoom創作交流会を経て8人の作り手によって5曲を作り上げた。

こうした全国の活動を反映して、2年ぶりに広島で開催されたひろしま祭典・オリジナルコンサートでは、46団体が48曲を熱演した。コロナ禍を考慮して初めて映像参加も認め12団体が参加。結果として参加団体数は例年とほぼ同じとなった。合唱・オリジナル発表会では唯一ライブ配信も行い、新しい取り組みにも挑んだ。2年間続いたコロナ禍で、うたごえ運動も含め、ほとんどの文化活動の練習や本番がストップする中、日本のうたごえの創作活動は止まらなかった。コロナだからこそ見えた世界、人間の姿、怒りや願い。練習に集まらなくてもオンラインというツールを駆使して、学び・創造・交流を旺盛に進め、創作活動を活性化させてきた重要な取り組みとなった。

②合唱発表会運動、地域・分野のうたごえ祭典

〈方針3〉 合唱発表会を地方、産別、全国ともに活発にし、学び合

い、創造の高まりをめざす
〈方針4〉 地方祭典の全都道府県の開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期計画を持つ

● 県、産別、全国の合唱発表会

全国的なコロナ感染状況の広がりの中、行政の対応の違いなどにより、各地域産別の合唱発表会はそれぞれの状況に合わせた開催となった（13都県、1産別Ⅱ国鉄で開催）。青年はハイブリット開催による合唱交流会として18団体参加。

ひろしま祭典・合唱発表会は23道府県、1ブロック、7産別からの予選と合唱発表会が開催できなかったところは19年度実績の参加枠で開催。25都道府県、4産別、1階層、加えてオリジナルコンサートでの映像出演2県が参加。結果、参加団体、人数は例年の約3分の2となった。練習不足も散見されたが、全体として、生声の演奏による喜びと励み、参加意欲に溢れ、生き生きとした演奏が交流ができた。

「練習の積み重ね、聴き合うことが連帯すること、うたごえ運動としての気概を持つことを期待する」と提言も得た。

運営面では、参加団体数が少なかつたことによる要員不足など支障をきたした一面もあった。出演団体の理解と協力、適切な要員配置と專業化の検討も今後の研究課題となっている。新しい団体に積極的に参加を呼びかけるとともに、運営を工夫し、豊かな交流ができる合唱発表会をつくること、合唱発表会未開催県の開催計画を持つことも今後の課題である。

●地方祭典、産別祭典

例年行われていた県祭典、ブロック祭典、産別祭典も多くがコロナ禍で開催断念に追い込まれた。その中で、産別では自治体、国鉄が開催。青年のうたごえは2年がかりとなった愛知で交流会を開催。実参加が無理ならオンライン、リモートで、学ぶ分科会も企画し、開催地地元の青年組織とのつながりも軸に成功させた。

●核兵器禁止条約発効！ひかりに向かって 2021日本のうたごえ祭典Ⅲひろしま

ひろしま祭典は、《記念音楽会》ピーススウェーブコンサート（広島文化学園H B Gホール）、《音楽会》コンサートヒロシマ・I 夢よひろがれ、

コンサートヒロシマ・II 響けうたごえ（アステールプラザ大ホール）の3つの音楽会を軸に、大うたごえ、碑めぐりうたごえ、献歌のひろば、と被爆地広島ならではの豊かな企画で行われた。当初予定のグリーンアリーナでの数千人規模による大音楽会は会場を変更し、コンサート形式による2つの音楽会で聴きごたえのある演奏を交流した。核兵器禁止条約発効の記念すべき年の祭典として、「日本の核兵器禁止条約批准を推し進める力になれますように。ここから願っております」とサロー節子さんよりメッセージをいただき、心に残る祭典となった。

●2022年以後の日本のうたごえ祭典の計画を持つ

2022年は、コロナ感染状況をみながら、「日本のうたごえ全国交流会・あいち」として12月2日〜4日に開催。2023年はうたごえ運動75周年の年、北海道で開催（8月25日・金から27日・日、札幌市）。2024年は佐賀で、2025年は阪神淡路大震災30年、兵庫での開催に向けて検討を進めた。

③うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」

〈方針5〉「うたごえ発ジャーナル」としてうたごえ新聞をいっそう輝かせ、歌の広がりとともに読者を意識的に広げる。「読み・作り・広げる」紙面から運動の財産を学び、創造・組織・普及の力にする

コロナ禍でも全国の実践を反映した通信活動が運動のエネルギー、活動を伝えた（通信1078通）。また、各界からの寄稿、インタビュー等で憲法、核兵器廃絶への運動を進める力を伝えた。中でも池内了名古屋大学名誉教授（宇宙物理学）の「平和憲法日本国憲法下で進む軍事研究と科学者」、岡田知弘京都大学名誉教授の「デジタル庁創設と基本的人権」は、今、危機にさらされる日本国憲法、その背景を伝え、読者の反響も多かった。

核兵器廃絶へ、新年号のサーロー節子さんへのインタビュ、東京都原爆被害者協議会会長の家島昌志さんから「被爆者の声を聞く」シリーズ、「音楽」という橋で人と人をつなぐ」コロナえりかさん（ソプラノ歌手、ベネズエラ）ら。

コロナ禍で音楽と向きあう、「芸術とは、社会発展のプロセス」平野喜一郎さん（哲学者）、ヴァイオリニスト松野迅さんの楽譜から観る「歌う・呼吸すること」4回連載。「ことばを紡ぐ」エッセイスト水野スウさん。海外からの話題、新年号から連載の「オーストリアからの糸電話」は、福祉に厚いオーストリア、その背景が伝えられ、好評。

ひろしま祭典開催地広島からは、祭典ゲスト、地元音楽家内田陽一郎、齊城英樹、松本憲治、寺沢希、三上和伸、森光七彩各氏らの登場で祭典企画の魅力を伝え、また、祭典グッズ紹介等活発な送稿で祭典成功へとつなげた。

読者拡大 都道府県で353人の拡大。9月に行った組織活動者会議（愛知）で「1団体一人の申請読者増」の目標を新たに進めたが、結果は総会基数を下回った。その中でも大阪は総会基数比+1.3。福井+20、祭典開催地広島は+2.8。

東京、大阪、愛知では独自ニュースを定期的に発行し、毎月の協議会会議での現状把握、拡大実践の交流が力になっている。各団体の機関紙で意識的に拡大が追求された。協議会発足で分局も生まれた島根は、読者拡大も進んでいる。

全国で「うた新フォーラム」を展開する

京都のうたごえは「うた新ファンクラブのつどい」を開催。紙面感想交流、うたごえ新聞製作過程や通信について、新聞への要望などが話し合われた。「読み・作り・広げる」ためにフォーラムの開催を計画していく必要がある。

通信活動を活発に

愛知の藤村記一郎さんは愛知のうたごえ（まなぼ企画）レポートはじめ寄稿依頼等、精力的に送稿（掲載数26本）、紙面づくりに大きく貢献。東京の箱崎作次さんも歌づくりと普及活動で活発に通信。北海道・石塚茂子さんは地元の平和活動はじめ送稿と企画提案。神奈川の河野好行さんは二宮町にある「ガラスのうさぎ」像の背景を寄稿。青年のうたごえは座談会等独自企画を送稿。情勢と切り結ぶ、全国からの通信活動活性化はさらに重要になっている。

季刊「日本のうたごえ」

今年度No.191と194号を発行。No.191は小畑雅子全労連議長へのインタビュを掲載。「人間らしく生きる」ことは権利です」は、コロナ禍、働くこと生きるための連帯の力を伝えた。「コロナ禍の中の音楽創造」（渡辺享則）。No.192は総会特集号。被爆者矢野美耶古さんの講演と総会全発言。No.193は小村公次さんの講演「戦時下の音楽と戦後の音楽」時代と社会の中の音楽」。水野スウさんの創作講習会での講演「さもちは言葉をさがしている」。田中嘉治さんの活動者会議講演「いま問われるメディアの役割と機関紙について」などを収録。No.194はひろしま祭典開催地の取り組み。「文化をまもり、日本の未来を照らすために」（中田進）、「コロナ禍、人間にとって芸術とは」社会発展と音楽のプロセス」（平野喜一郎）。

各号で全国創作センターに寄せられた曲から選考委員会推薦曲を紹介。各号の別注文（特にNo.194は筆者中田進さんの50冊近い普及）があるが、定期読者数は微増に留まっている。大胆に広げる施策が求められている。

創刊65周年記念シンポジウムを成功させる

5月23日、愛知で「ビッグな歌とお話」として、まほろば遊さんの演奏、作曲家池辺晋一郎さんとジャーナリスト青木理さんの対談を企画。対談は音楽、時代、政治を俯瞰し大好評を得た（全文うたごえ新聞に2

1 回連載で紹介)。コロナ禍、会場の稲沢市民会館入場規制いっぱい参加者と愛知のうたごえ、開催地地元サークル（「コーラスかえる」）の奮闘で成功裏に終えた。

④学習・教育活動

〔方針6〕演奏・創造・普及活動の旺盛な展開。運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育活動を進め、次代のリーダーが育つ環境づくりを計画。

コロナ禍2年目、活動制限の中、後半は徐々に練習も再開した。感染リスクの高い合唱だが、感染対策ガイドラインなどを参考に模索し、演奏会、練習会、地域合唱発表会等の活動が続けられた。

●各地の教育活動

北海道では、合唱指揮講習会、道祭典に向けた全道練習会、70年史の学習会等計画されたが、コロナ禍で断念。全国的に教育活動ができない地域が続出した。

京都では、全国講習会参加や京都府民音楽会開催も断念したが、ひろしま祭典に向けた合唱練習会を開催。舞台で歌えない人も参加して連帯が広がった。また、京都のうたごえ75周年へ、運動の始まりから、職場・地域サークルの起こりの聞き取りと当時歌われた代表的な曲を歌うなど立体的にうたごえ運動を学んだ学習会が持たれた。

大阪では、「核兵器禁止条約発効記念のつどい」を被爆者の講演、「音楽と映像でつづる原水爆禁止運動とうたごえ運動のあゆみ」を作成・上映、コンサートで開催。記念CD、当日のDVDも普及した。

愛知では、コロナ禍で延期したのもあったが引き続き（まなぼ企画）を実施。発声&合唱講座（講師：永ひろ子、山本高栄）、小村公次さんの講演会「戦時下の音楽と戦後の音楽」。創作連続講座（講師：石黒真知子）

など。今後、スタッフ講座第2弾、指揮者講習会も計画。この企画は定着し、期待が高まっている。名古屋市内だけの開催から東三河（豊川市）でも行い、好評。（まなぼ企画）成功は協議会創造委員会が定期的に開かれ、立案&実施していること。また、地区合唱発表会への講師委員派遣、県合唱発表会・創作発表会の講師委員選定などが話し合われている。

広島では、「ひろしま祭典成功へ、合同練習会は命綱」と精力的に実施。専門家の協力を得、理解と共感を広げ、創造の力となった。また、練習模様をオンラインで配信するなど新しい技術と手段獲得にも挑戦し、祭典成功の力となった。うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」の記事は社会的・文化的視点からも注目された。「うたごえは生きる力」、対談集「池辺晋一郎の夢を見えますか」などもあわせ、さらに積極的に学習・教育活動に活用し、うたごえの創造理念を深めていく必要がある。

●全国講習会

西日本合唱講習会は5月に広島（南区民文化センター）で行い、地元参加者44名含む8道府県15団体68名が参加。緊急事態宣言が関西方面4府県に出され、開催が危ぶまれたが、核兵器禁止条約発効の今、広島で開催する日本のうたごえ祭典の意義、その重大なスタートラインと位置づけ開催した。参加者からは「豊かで充実した時間になった。12月には祭典でたくさんの人と歌い交わりたい」など好評の講習会となった。

感染防止策を明記し、事前に徹底。また、必須条件とはしなかったが、「体調管理、感染防止の行動。PCR検査」をよびかけた。

講師陣は、音楽に青山邦恵さん、合唱に寺沢希さん。運動内からは渡辺享則、山本恵造、高田龍治。祭典本番の演奏を想定させる集中感と充実した講習となった。また、「核兵器禁止条約の発効は『核兵器の終わり』の始まりです」と題した広島県原爆被害者団体協議会佐久間邦彦理事長の講演は、うたごえ運動との関わりも語られ、有意義だった。

東日本合唱講習会は6月に2日間、東京（中央区月島社会教育会館）

と神奈川（横浜市の社会福祉センターホール）で開催。約80名参加。感染者数がまだ多く、緊急事態宣言下、練習もままならない中だったが、東京のうたごえ、関東ブロック会議は粘り強く準備した。両日同じ曲を深め、声楽講座の時間は発声指導を合唱講座の中に組み込むなど時間を短縮した。また、西日本講習会に做って、事前の感染防止策を徹底した。会場を2カ所にしたことも参加者を広げ、功を奏した。東京を中心とした関東のうたごえの連帯が成果にむすびついた。

全国指揮・合唱指導講習会（教育講習会）は例年の6月、長野（松本市あがたの森文化会館）で3日間の日程で計画したが、コロナ禍、開催を断念した。特別講師指揮法に工藤俊幸さん、合唱特別講座には広島から寺沢希さん、運動内講師は例年通りで準備したが残念であった。感染対策をとって情報交換を図り、最善を尽くして運動を進める必要がある。

日本のうたごえ合唱団2021もコロナ禍の影響で新春合宿練習が行えず、8月に練習会及び結成総会を行い、ひろしま祭典・ピースウェーブコンサートに72名で参加。「炎上」他の充実した演奏を行った。少ない練習回数で演奏に向かう個人の努力と創造的連帯に学ぶことは大きい。

●次代を担うリーダーの育成

愛知のうたごえは指揮を学ぶ実践を行っている。専門家を指揮者に迎える団体も多い中、運動内から合唱づくりのリーダーや団内指揮者を育てていくために、講習会に意識的に送り出し、団内、協議会での勉強会、専門家との協働があらためて求められている。

⑤青年のうたごえ

〈方針7〉青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、次代を担う青年を迎える。

サークル・合唱団・協議会での青年・学生とつながる活動、「学びの場」を意識的に持つ

コロナ禍が続く中、対面での練習とリモート練習の工夫を重ね、各地で活動を進めた。愛知の東海青年のうたごえは、全国青年のうたごえ交流会企画として「語り合おう青年活動のいま」を民主団体とともに行い、全国交流会につながった。宮城の若星Z☆（わげすたーづ）はWOW（ウーマン・オブ・ザ・ワールド）コンサートに取り組み、コンサートは中止となったが、WOWメンバーの一人植田あゆみコンサートに取り組んだ。地元の青年団体とつながり、2022年全国青年のうたごえ交流会「宮城」につながる方向。長野のザ・イスカンドルは長野市開催のWEBフェスに参加し、地元のラジオ番組にも出演。愛媛合唱団青年部Green Love Cantabile（GLC）は、愛媛合唱団創立50周年とGLC創立10周年を視野に、2023年に愛媛で四国初となる全国青年のうたごえ祭典開催を決定。

仲間づくり、サークルづくりへ、団体・分野を越えたネットワークづくり

原水爆禁止2021年世界大会オンラインでの文化企画「約束のうた」 「今この時代に」の演奏に動画で多数が参加した。また、同大会青年集会「Rink! Ling! Zero」ではGLCが動画を提供し、クオリティの高さが好評となった。

2021年全国青年のうたごえ交流会「愛知で青年のうたごえ活性化と位置づけ、青年を積極的に送り出し、ひろしま祭典につながる。」

オンラインを活用しての取り組みにより、現地と合わせて117名が参加。

合唱交流会は、1. 企画参加、2. 現地参加、3. サテライト会場をつくらってリアルタイム参加の3つの方法を取った。遠方のメンバー、サテライトをつくれず会場参加ができないメンバーも合唱交流会に参加す

ることができた。交流会をキッカケに、ひろしま祭典開催地の青年を励ました。広島がひろしま祭典成功に尽力できたことは世代継承を進める上で貴重な経験になった。ひろしま祭典では、コンサートヒロシマIで「HEIWAの鐘」「ひかりにむかって」、コンサートIIで「広島へ」「青い空は」のステージを盛り上げた。

⑥ 組織建設連帯活動

〈方針8〉①サークル・合唱団をつくり、合唱団員をふやす

②合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」読者をサークル・合唱団で目標を持ち、計画的に増やす

③加盟団体500、協議会のない県での確立をめざす

加盟 うたごえ空白の島根で島根うたごえ協議会発足。ひろしま祭典にも連帯し、2年の準備を経て12月に4地域でサークル（うたごえ・つばき、うたごえ「陽だまり」、うたごえおおち、たんぼぼ）で発足し、全国協議会に加盟。

加盟は島根の4団体含め7団体。京都では「和太鼓ドン」が4月にコロナ禍の中で学内での練習ができないため協議会の会場を利用したいと再加盟。愛知では尾張地域の団体や協議会の働きかけで9月、「一宮うたごえ サークル tomorrow」が、北海道では11月に「アウニシンガーズ」が加盟。一方、コロナ禍で活動休止を余儀なくされるなど4団体が退会（活動再開の折には再加盟の意思も）。

サークル・合唱団、会員拡大 練習を継続、再開し、特に演奏会を開いた団体では、歌いたい要求の受け皿として団員を増やしたところもある。しかし、コロナ禍が影響し、退会した会員もあり、加盟人数は減少。そのなかで鳥取では、広島から移住したメンバーがひろしま祭典組織を広げ、サークル誕生につながる新しい芽も生まれている。

ブロック活動では、例年ブロック交流会を行っている関東・東京、東北などがコロナ禍で行えなかった。関西ブロックとしてひろしま祭典応援を派遣した。関東ではブロック会議が定期的に持たれ、交流連帯が行われている。東北はオンラインも活用して各県代表者会議を行った。

職場のうたごえは、現役が少なくなり、いかにうたごえを広げ、継承するかが大きな課題となっている。

⑦ 事業・普及活動

〈方針9〉①普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物の企画と普及でうたごえの前進の力とする

事業普及はコロナ禍の下で2020年度に続き特別な困難を伴った。2021メーデー歌集は、ひろしま祭典テーマソングと普及曲を掲載した特別版を用意し2020年メーデー歌集に織り込んで使用し、普及に取り組んだ。

全国でひろしま祭典成功に向け「日本のうたごえ合唱曲集ひろしま」や「うたごえ作曲家によるオムニバス創作曲集『風の音符たち』」を使用して練習、演奏が取り組まれた。

小林康浩作品集「小さな町から」CDブック・「白鳥の歌」楽譜集を発売。東北を中心に700を超える予約活動が取り組まれた。井上鑑さん音楽監督のもと制作された「私たちの大切なうた」も期待が高まっている。

各合唱団が取り組んだ演奏会のCDや楽譜の制作も各地で取り組まれている。各地の経験を全国に広めるためにも、うたごえの出版物として全国発信できる出版方法の検討とあわせて著作権順守も啓蒙していく必要がある。

加盟団体で事業活動を進めるために事業部担当をおき、事業普及活動

を活発に進める。

2021年はオンラインを活用して、事業普及部会を毎月1回(計9回)開催した。そこで出された事業普及の経験交流が普及の力となった。「ひろしま祭典グッズ」普及についても話し合わせ、時事にかなった取り組みができた。

楽譜のネット配信など、インターネットを活用し、新たな層へのうたごえ普及の力にする。

音楽センターのサイトでうたごえの楽譜や音源がダウンロード購入できる。また、インターネットサイトにも出品していて、そこでの売り上げも伸びている。インターネットへのうたごえコンテンツの紹介はさらに推し進め、各地の合唱団等でもこの仕組みを活用できるように工夫することが求められる。

⑧ 郷土のうたと踊り

〈方針10〉「郷土のうたと踊り」活動を旺盛に展開し、専門家と協力協同、全国講習会の充実、経験交流を活発にする

① 東西郷土講習会を成功させる

東西講習会 西日本は5月、東日本は7月に、ひろしま祭典・全国郷土合同『生命の詩』につなげる講習会として、作者今福優さんを講師に計画したが、コロナ禍、今福さんの講習が中止となった。が、東日本は7月に、花原京正氏を講師に「エイサー踊り」(島唄)を開催し、50名が参加。第24回江戸やっこまつり(23団体220名参加)につないだ。西日本は7月に、兵庫で和太鼓・合唱「生命の詩」の講習会を開催(30名参加)。ひろしま祭典・コンサートヒロシマ・Iの「生命の詩」には広島の中高校生54名を含60名が和太鼓に、76名が合唱に参加し、オープニングを飾った。

② 経験交流を活発にし、うたごえ新聞に反映させる

コロナ禍で練習会場閉鎖等、練習ができない状況が続いたが、神戸市役所センター合唱団の太鼓衆団輪田鼓は、和太鼓・民舞20教室を運営。10月「陰陽師・安倍晴明」を公演。西播センター合唱団民謡集団「鯨」は、WHO姫路大会開会式や私学高校の音楽鑑賞会に「姫山太鼓」他で出演。調布狛江合唱団郷土部「跳鼓舞」は特別支援学校の和太鼓鑑賞教室に出演。静岡合唱団なま郷土部は静岡太鼓フェスティバル2021に「駿河の鼓動」他で出演。東播センター合唱団は60周年記念コンサートで合唱・和太鼓「生命の詩」を約50名で演奏した。

③ 専門家・保存会との協力関係を進める

東西郷土講習会、日本のうたごえ祭典の取り組みの中で、専門家との協力が進んだ。また、輪田鼓は和太鼓・篠笛・民舞などの各種教室を開講。

④ 「全国郷土センター(仮称)」ネットワークづくりを検討する。

年1回の全国協郷土部会経験交流に加え郷土部のlineグループを立ち上げ、今まで以上に交流・情報交換を深めた。

⑨ 専門家及び他団体との協働連帯活動

〈方針11〉専門家及び他団体との情報交流、協力共同で音楽文化の豊かな発展をめざす

ひろしま祭典では、多くの専門家の協力を得て、魅力ある祭典企画及び合唱発表会を作り上げた。うたごえ75周年記念委嘱作品には6人の音楽家の協力を得て記念曲集「スタートライン」(仮称)3月出版予定。

原水爆禁止日本協議会や世界大会実行委員会、平和大会実行委員会などと連携し、世界大会、核兵器禁止条約推進の運動を進めた。

⑩ 国際交流

〔方針12〕世界の音楽家、音楽団体との国際交流をさらにひろげる。とりわけアジア、世界への視点で75周年に向かう世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪を広げる

ひろしま祭典では、広島朝鮮学園舞踊部、オンラインで韓国からキム・ウオンジュンさんが出演。

70周年記念祭典でつながったWOWや世界の音楽家・音楽団体との演奏交流の計画を持ったための研究を進めた。

75周年の今年を 憲法施行 「6つの止」実現の希望の年に

私たちをとりまく情勢

〈コロナ禍―いのちとくらしを守る社会を〉

新型コロナウイルスのパンデミックから2年。全世界の感染者は昨年未で累計2億8653万人、死者も約540万人となった。欧米各国で再び感染が拡大している中で、世界保健機関(WHO)は「アフリカ諸国の途上国でワクチン接種を完了した人は全人口の8.6%に過ぎず、一方先進国はオミクロン株の流行で3回目の接種を開始するなど、「ワクチン格差」の是正に世界が取り組むよう訴えた。

日本においても昨年、五輪開催中の7月末には1日当たりの新規感染者が初めて全国で1万人を突破、ピーク時の8月下旬には2万5千人を超えた。それでも政府はPCR検査を軽視し、臨時の医療施設の増設にもまともに取り組まず、「原則自宅療養」の方針を打ち出し、結果、自宅

で命を落とした人が8月だけでも250人以上いたことが政府から発表されている。その後、国のコロナ予算65兆円のうち22兆円が使われていないことが、会計検査院の調べで明るくなった。なぜ時短や休業のための十分な補償や医療体制の整備や医療従事者等への手厚い待遇などに費やすことを怠ったのか。さらに怒りの輪をかけるように、政府が感染拡大防止を呼びかけていた11月～12月には「勝負の3週間」とのスローガンを掲げ、国民に不要不急の外出自粛などを呼びかけていた中にも関わらず、菅前首相や西村再生相ら当時の閣僚を含む国会議員70人が、計85回の政治資金パーティーを開催、総収入は計8億円だったことが明るみになった。

昨年末、日本ではコロナが一定収まりつつある状況下であったが、年が明けて「オミクロン株」が全国で急拡大する中、東京、大阪、京都、兵庫、沖縄などで無料のPCR検査がや々と始まった。いまこそ検査・医療体制の強化と3回目のワクチン接種の前倒しなど、いのちとくらしを守る対策に政府は全力あげなければならない。

〈大軍拡につながる改憲を許さない〉

昨年の総選挙で改憲勢力が改憲発議に必要な3分の2超の議席を確保。自民党内では、夏の参院選で勝利すれば、衆院の解散がない限り大きな国政選挙がない「黄金の3年」となるなどとして、改憲の動きを一気に強めるとの思惑も出ている。

この機に乗じて、安倍元首相は、台湾有事における安保法制の発動による「自衛隊のコミット(関与)」を繰り返して発言している。この安倍発言は、むやみに中国を挑発し日米同盟の有事を口実に米国とともに「戦争する国」づくりを目指す極めて無責任で危険なものである。

さらに22年度政府予算案では、歴代内閣で違憲としてきた「敵基地攻撃能力」保有につながる計画も浮上、軍事費が5兆4千5億円と過去最大となり10年連続で増え続けることに。

岸田政権は、今後軍事費について国内総生産(GDP)比1%枠内にこだわらず、米国がNATO同盟国に求めている数値と同じ「対GDP

比目標（2%）」も念頭に、「防衛関係費の増額を目指す」と大軍拡路線を表明している。

軍事費をいくら増大させても新型コロナウイルスに対しては核もミサイルも無意味で、「人」を守るための防衛費、すなわち医療体制の充実に使うことこそが何よりも有益である。

戦後の世界は、再び戦争を起こさないことを望み、日本も深い反省の上に立って日本国憲法を誕生させた。昨年11月、岸田首相は就任会見直後に、総裁直轄の「憲法改正推進本部」を「憲法改正実現本部」に名称変更した。憲法施行75年の節目となる今年、戦争につながる9条改憲を決して許さない運動を市民とともに連帯しながら盛り上げていくことが喫緊の取り組みとして重要になっている。

〈核兵器禁止条約の批准を！〉

昨年1月22日、核兵器禁止条約が発効され、昨年12月末現在で59カ国が批准している。

日本政府に核禁条約への署名・批准を求める地方議会の意見書は昨年未で625に達し、全1788議会の35%になった（日本原水協調）。

このことは核禁条約を支持する国民世論の広がりを実に示すものと言える。本年はウィーンで締約国会議が初めて開催されるが、アメリカと核兵器を「共有」するとされるNATO主要国のドイツは、この会議にオブザーバー参加することを表明（同加盟国のノルウェーも参加）。唯一の戦争被爆国の日本は条約に背を向け続け、オブザーバー参加も拒否している。岸田首相は「被爆地・広島出身の首相」の名に恥じないよう、いまずぐにでも条約に署名・批准する責任を果たすことが求められている。

〈沖縄本土復帰50年の節目を新基地建設阻止の年に〉

沖縄県名護市辺野古の米軍新基地建設をめぐり、玉城デニー知事は昨秋、軟弱地盤の改良工事に伴う「設計変更申請」を不承認とした。これに対して防衛省沖縄防衛局は、不承認の取り消しを求める不服審査を国

土交通省に請求。「軟弱地盤に砂くいを無理やり打ち込めば護岸が最悪崩壊する」と地質学者も警鐘を鳴らしており、「この基地は絶対に完成しない」。デニー知事は断じた。

その沖縄の本土復帰から50年となる本年。うたごえは、沖縄返還のたたかいとして1950年代後半から「沖縄を返せ」の歌を全国に広め、運動創立20周年記念事業の集大成となる歌劇「沖縄」の制作に取り組み、全国上演を成功させてきた。

その沖縄には今もなお、国土面積のわずか0.6%の地域に、米軍専用施設の約74%が集中している。しかもこれらの米軍基地は地位協定に守られ事実上の治外法権となっており、米軍キャンプ・ハンセンでは新型コロナウイルスの大規模なクラスターが発生。国内の全米軍基地で米兵がPCR検査をせず入国していたことが発覚、水際対策の抜け穴となっており検疫体制の欠陥といえるこの協定の改正は待ったなしの状況である。

去る1月の名護市・南城市の市長選で「オール沖縄」が推す新人と現職が共に及ばず、今後、県内各地の市長選、県知事選、参院選をはじめ辺野古の新基地建設をめぐるたたかいで勝利をつかむため、うたごえも力を尽くすことが求められている。

〈原発ゼロの日本と気候変動の危機打開を〉

名だけで終わった「復興五輪」。元首相の無責任なアンダーコントロール演説から9年、福島第一原発の廃炉作業はおろか、汚染水対策もままならぬ現状は「アウトオブコントロール（制御不能）」に等しく、事故から11年近く経っても、福島第一原発はいまも「原子力緊急事態宣言」下にある。汚染水は1日平均140トン発生し、貯蔵タンクは23年夏までには満杯に達するといわれており、海洋放出処分とする政府方針に対し、漁業関係者や地元周辺では強い反対の声が上がっている。

昨年、イギリスで開かれたCOP26で日本が前回に続き再び「化石賞」を取ったように、石炭火力発電にしがみつく姿勢は世界から批判的となっている。岸田政権においても国内での火力発電の使用を継続し、さらに9カ所の石炭火力発電所の増設を計画している。

また、エネルギー基本計画案で2030年度の発電量の20〜22%を原発で賄うとした（19年度原発比率は6%）菅前内閣を継承。再稼働可能な27基と2030年時点で運転期間40年を超える12基も含めて、フル稼働させるとしている。東日本大震災により、いまなお7万人が避難生活を余儀なくされており、日本は、原発依存社会を続けるのか、再稼働を許さず「原発ゼロの日本」にすすむのか、大きな岐路に立たされている。

（いのちとくらしを守る政治を）

「自己責任」と「弱肉強食」の新自由主義路線をひた走る自公政権のもと、貧困と格差の拡大が深刻化している。

アベノミクスの9年間で、資本金10億円以上の大企業の内部留保は467兆円で過去最高。大富豪の資産額が6兆円から24兆円へと4倍に膨れ上がる一方、労働者の実質賃金の平均額は年22万円も減っている。さらにコロナ危機の追い打ちにより、非正規雇用の労働者、とくに女性と若者が真っ先に切り捨てられ、犠牲にさせられている。

消費税は高齢化社会に向かう社会保障の財源確保として導入されたものであるにも関わらず、消費税導入の89年からの31年間の税収合計と社会保障費合計を比較してみると、社会保障費の合計額は688兆円、消費税は339兆円となっており、到底消費税だけではまかなえない。社会保障費をまかなった主要財源は、947兆円（歳入合計の36・7%）の国債である。この間、消費税は年金などの財源には積み立てられず、大企業と高額所得者の減税分の穴埋めに使われている。

（コロナ禍の中、いのちと音楽にどう向き合うか）

コロナ禍のもとで、日本の文化・芸術は戦後最大の危機に直面している。昨年2月の安倍元首相によるイベント「自粛」要請以後、音楽・演劇など多くのジャンルで公演の中止や延期が強いられ、芸術団体やアーティストはじめそこで働く舞台スタッフなど多くの芸術家やフリーランス、創造・鑑賞団体の収入が激減し、その苦境はいまも続いている。

全日本合唱連盟が「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」第3版について新型コロナウイルス変異株対応を踏まえた追加修正を行った第3・1版（22年1月24日付）は、合唱活動を始めとする文化芸術活動を停止するのではなく、いかに継続させ発展させていくかという観点で更新されている。本ガイドラインの感染防止策により感染を100%防げるということではなく、慎重に判断し活動するよう心がけ、各地の感染状況を踏まえ、より適切な対策を講じるよう活用を促している。

合唱の効果としては精神面だけでなく、「歌唱活動は呼吸器官機能向上として科学的に実証されており、（中略）そのため、健康活動としての歌唱活動を広めることで、より一層合唱活動の存在意義が認知される可能性がございます」（本山秀毅）。

うたごえはこの合唱を主体とした音楽性と社会性とを統一した運動であり、コロナ禍における今こそ、感染防止対策に意を注ぎ、「何のための合唱活動」なのかの原点に立ち戻って運動を継続させていくことが重要となっている。

経済学者の平野喜一郎氏は、「なぜ日本の芸術家が『地獄のような状況』におかれている一方で、ドイツの政治家が文化、芸術を大切にするのか：それはドイツ人が音楽の伝統を大切にし、それを発展過程にあるものとしてとらえてきたから」（季刊『日本のうたごえ』）

経済の国有化、公有化を廃し、全てを自己責任にする新自由主義が被害を激化させたと警告する氏の論文「コロナ禍、人間にとっての文化・芸術とは―社会と音楽発展のプロセス―」はまさに今、我々が向き合わなければならないテーマを鋭く投げかけており、うたごえ（をはじめ芸術を志す者）への大きな励ましにも深刻な問いかけにもなっている。

氏が蒔いた知の種を活かし、「次の時代を創る」運動につなげていくことが求められている。

コロナ対策に工夫を凝らし、合唱運動の継続と未来の運動を創る青年と世代を越えて絆を深める年に

うたごえ運動75周年につながる

2022年・活動方針

オミクロン株急拡大の中で社会機能のマヒが危惧されている。政府は、ワクチンの追加接種や検査体制の遅れ、医療体制・保健所機能を強化してこなかった後手後手の対応を反省もせず、自分で検査をしたうえで陽性を確認したら自宅療養する方針まで打ち出した。まさに医療における「公助」を放棄し、国民に「自立・自助」を求める無為無策の極みといえる。

コロナ禍で、感染に対して団員の温度差もある状況下では、安易に走らず、しかし過剰な反応で練習や公演などの合唱活動を禁止するのではなく、どのような対策を講じれば合唱活動が実施でき、今後継続させていけるか。検温、消毒、換気などの基本的対策は言うまでもなくコロナ差別・偏見をなくすこともコロナ対策のひとつであり、工夫を凝らし、一歩踏み出し、できることは何かを団員みんなで真摯に話し合います。

合唱活動をいかに継続させるか。コロナ禍だけの課題ではなく将来にわたる運動の未来を考えると、次代を担う青年を迎える活動は重要性を増しており、「若者の運動参加」は喫緊の命題といえる。運動をこころで発展・継続させてこれた原動力は「人」であり、私たちは、合唱や音楽を通して人生の大切な「時間」を共有してきた。人が運動を創り、運動が人を創ってきた。いま重要なことは、運動を拓ける中で若い人たちが参加できるような体制や機会、場をどう創り上げていくかである。日々の活動の中で、アンテナを高く掲げ、若い人たちが何を求めているのか。その要望や意見に耳を傾け、若者が主役となり世代を越えて絆を深

めていく活動を最重点活動の一つとしてこの1年取り組みましょう。

方針① 青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、青年が主役となる活動を計画し、次代を担う青年を迎える。

①サークル・合唱団・協議会で青年とつながる活動、「学びの場」を意識的に持つ。

②仲間やサークルづくりへ、団体・分野を越えたネットワークづくりを強める。

③2022年全国青年のうたごえ交流会、宮城を青年のうたごえ活性化の場として全国から青年を積極的に送り出し、2022年全国交流会・愛知につながる。

④「沖繩を返せ！」第5次うたごえ沖繩行動で青年のステージをよびかける。

方針② 憲法改悪を許さず、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、コロナ感染防止、9条改憲政権に止（とど）めの「6つの止」実現のため市民共闘と連帯しながら憲法のこころを広めよう。

①全国署名を旺盛に広げよう。

・「9条改憲NO！全国市民アクション」が呼びかけた「憲法改悪を許さない全国署名」に取り組み、憲法のこころを歌や音楽で広める。

・「日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」を全国で強め、6・9行動はじめ全国各地で街頭宣伝等を行い歌や音楽で核兵器廃絶をアピールする。

②「戦争法に終止符を！音楽人・団体の会」事務局体制の強化を図りながら今後の活動のあり方について検討していく。

③辺野古新基地建設を断念させる沖繩県民のたたかいに連帯して、「沖

縄を返せ！うたごえ大行動本部」を強化し、全国で「沖縄を返せ！うたごえ基金」に取り組む。

・作曲や替え歌作りで連帯し、支援の輪を広げる。

④核兵器禁止条約締約国会議の成功へ、日本原水協と運動づくりを検討する。

⑤11年を迎える東日本大震災被災地の復興・再生への支援を継続し、全ての原発の再稼働を許さず原発ゼロの社会をめざす歌をつくり支援の輪を広げる。

⑥米軍基地での米兵の自由な往来が感染爆発の原因ともなっている。

検査体制をとらない政府の人災であり地位協定の抜本的な改定が強く求めていく。

⑦コロナ禍の下、合唱練習や公演を実施できるよう、でき得る感染防止対策を講じながらサークル・合唱活動を進めよう。

方針〈3〉「共に生きる町づくり、地域づくり・職場づくり」のうたごえを活発に広げる。

①合唱・器楽・和太鼓・民舞等多様な形態でうたごえを広げ、平和で健康なうたを普及する。

・全市区町村で多彩なうたごえを展開し歌を創り、普及活動を旺盛に展開する。

・全サークル・合唱団で職場に歌を届けサークルづくりの計画を持ち実践する。

②全国各地で平和コンサートや地域原水協と協力共同して平和うたごえ等を開催し、平和行進、世界大会につなげる。

③みんなで創り歌う運動を広げ、創り手を生み出し創作活動を活発にする。

・「全国創作センター」の周知徹底ならびに創作活動の旺盛な展開を図る。

・全国創作講習会を誰もが参加できる内容で成功させ、各地で講習会

を開催する。

方針〈4〉合唱発表会を地方、産別、全国とも活発にし、学びあい、創造の高まりをめざす。

①合唱発表会を協議会年間活動の柱に据え、演奏・講評を通じて交流し学び合う発表会の原点をいっそう輝かせる。

②参加団体を積極的に呼びかけ、運営に工夫を凝らし豊かな合唱発表会をつくる。

③合唱発表会参加団体を1600団体に、未開催県の今年度開催計画を持つ。

④合唱発表会のあり方について小委員会をはじめとした検討をもつ。

方針〈5〉地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画をもつ。

①うたごえを起こし、つながりを広げ、発展をめざす「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、地域・都道府県単位、産業別・階層別祭典を活発にし祭典運動の前進をめざす。

②2022年日本のうたごえ全国交流会・愛知を地元全国の連帯で成功させる。

・2023年日本のうたごえ75周年記念祭典を8月に北海道で開催する。

・2024年日本のうたごえ祭典を佐賀で開催する。

・2025年阪神淡路大震災30年、被爆・戦後80年、非核神戸方式制定50年に日本のうたごえ祭典を兵庫で開催する。

③祭典プロジェクトで26年以降の開催計画を具体化する。

方針〈6〉運動の魅力と人間的魅力が満載されている、「うたごえ祭りジャーナル」としてのうたごえ新聞をいっそう輝かせ、歌の広がりと共に

に読者を常に意識的に広げる。

① 「読み、作り、広げる」を合言葉に、紙面から運動の財産を学び、創造、組織、普及の力にし、読者拡大2023年目標の計画を具体化する。本年度2000人の新読者を迎え、21年度基数を回復する。

② 規模の大小を問わず「うた新フォーラム」などの全国展開を計画する。

③ 通信活動を活発にし、全国の活動経験を学びあう。

④ 季刊「日本のうたごえ」は、運動づくりのテキストとしての位置づけ、会員の全員購読、新読者500人増やす。

方針〈7〉演奏・創造・普及活動を旺盛に展開する中で、運動の歴史に学び、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育活動をすすめ、次代を担うリーダーが育つ環境づくりを計画的にすすめる。

① 運動の歴史を引き継ぎ、日常活動の中で教育活動を重視する。批評活動や運動の理論学習を進め前進の力にする。

・ うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」、「グレート・ラブ」、「うたごえは生きる力」等、学習・教育活動に活用する。

・ 75周年記念事業の一環「うたごえは生きる力」普及プロジェクトを立ち上げ会長・副会長の中から講師を派遣、本の普及と共に時代が求める祭典活動等の特徴と成果を学ぶ一助とする。

② 6人の音楽家による75周年記念作品の作品集を全国合唱講習会はじめ、運動内外に普及し、積極的に演奏機会を持つ。

③ 1996年以降改訂されていない「教育テキスト」の発行を検討する。

④ 各種講習会参加を強め、各協議会やブロック等で指揮者・指導者交流を活発にしそのネットワークづくりを進める。

⑤ サークル・合唱団・協議会の次代を担うリーダーづくりの計画をもつ。

⑥ 日本のうたごえ祭典の全国合同企画、「日本のうたごえ合唱団」への参加を強め、創造的連帯の前進をめざす。

方針〈8〉サークル・合唱団をつくり協議会への加盟をよびかけ、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。空白県をなくすために、サークル加盟を積極的におしすすめる。地域ブロックの連帯活動を活発にする。

① サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やす。

② 合唱発表会参加団体や協議会加盟団体を目標を持って計画的に増やす。加盟団体500団体をめざす。

③ 協議会のない県の発足を計画を持って進める。現在2団体が活動の地域は今年度中の協議会結成をめざす。

④ 職場のうたごえの建設強化を図る。

⑤ 今年全国組織活動・うたごえ新聞読者拡大会議を5月に愛知で開催する。

⑥ 全国1741自治体で活動団体の実態調査を行い、加盟拡大を図る。

方針〈9〉うたごえ事業出版物を多くの人々に広める制作と普及、事業活動を旺盛に展開しよう。

① 普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物をみんなのものにし、魅力ある企画と普及で運動前進の力とする。

・ 6人の音楽家による75周年記念作品集を講習会、全国交流会や祭典で位置づけ、歌うこととリンクして普及する。

・ 「うたごえは生きる力」対談集「池辺晋一郎の夢を見てますか」「メーデー歌集」CD等活用し、多くの人にうたごえを届け、闘いの大きなうねりをつくる。

・ みんなうたう会、うたごえ喫茶の活性化やうたごえ普及のために、出版物の活用や普及に努める。

・ サークル・合唱団の演奏活動と結んだCD、楽譜などを出版し普及

する。

② 全ての協議会加盟団体で事業活動が取り組めるよう事業部担当を置き、経験交流し、事業普及活動を活発に進める。

③ 楽譜のネット配信など、インターネットを活用した取り組みをすすめ、新たな層へのうたごえ普及の力にする。

方針〈10〉「郷土のうたと踊り」を旺盛に展開し、専門家との協同、全国講習会の充実、全国の活動の経験交流などを活発にする。

① 東西郷土講習会を成功させる。

② 全国の郷土活動、経験交流を活発にし、情報をうたごえ新聞に反映させる。

③ 専門家・保存会との協力を進める。

④ 「全国郷土センター（仮称）」ネットワークづくりを検討する。

方針〈11〉「専門家及び他団体との情報交流、協力共同により音楽文化の豊かな発展をめざそう。」

① 東・中・西日本での合唱講習会を成功させる。

・ 各種合唱講習会、指揮・指導者講習会など運動内外の専門家との協力共同を図り、うたごえの創造的力を高める。

② 平和・民主団体との交流、協同を強める。

方針〈12〉「アジアをはじめ世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる計画をもつ。」

方針〈13〉「うたごえ2023『ジョン』」をさらに補強する計画づくりと75周年記念事業委員会を発足させ、記念事業計画を検討・遂行する。

おわりに

半世紀近くうたごえの空白県であった島根から、「島根うたごえ協議会発足」の春の便りが列島を駆け抜けた。春とは生まれ、動き出すこと。発足総会で原健二新会長は「山口、鳥取 山陰からうたごえ文化をはばかせよう」と力強く挨拶した。

コロナ禍から丸2年、今も感染拡大への警戒が求められ緊張が続いている。その中でも果敢に音楽と向き合い、人と結びつき、うたごえの新しい命を芽吹かせた島根をはじめ、うたごえ運動を繋ぎ発展させてきた全国の仲間がいる。うたごえにとって時代を生き続けることは、今を生きる人間と音楽で結びつき、うたで対話することでもある。草創期から運動に参加し、平和と民主主義を守るたたかいの先頭に立って運動をけん引してきた先達たちが、どう「うたごえの世界」を切り拓いてきたのか、後続の我々がそこから何を学びどう生かしていくか。運動75周年の節目に向かう命題でもある。

うたごえは創立以来、いのちの叫びを歌に込めて、人々の心に勇気と希望の光を届けてきた。その運動を支えてきたのが、幅広い草の根運動と類まれなスペシャリストとのコラボレーションである。その具体的な取り組みが75周年記念事業にも色濃く映し出されている。

ひろしま祭典でも歌われたなかにし礼作詞の「リメンバー」。佐藤のぶが歌うリメンバーCDジャケット「悲しくも美しい平和への遺産」という影絵作品を手掛けたのが藤城清治氏。原爆ドームを中庭から描いたものだが、「人間の愚かさ」と残酷性の証明である原爆ドームがかくも美しく慈愛にみちた世界として描かれた例を私は知らない（なかにし礼）。

藤城氏が愛してやまない宮沢賢治の言葉。「世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」。社会をどう創り変え、一人ひと

りがどう考え行動していくのか。うたごえは歌や音楽でそのことを問い
続けていく。

◆2022年主な日程・予定

◎2022年うたごえの主な日程

日本のうたごえ全国交流会 in あいち 12/2(金)～12/4(日)
東日本合唱講習会 5/28(土)～5/29(日)
東日本郷土・特別現地交流会企画 6/25(土)～6/26(日)
西日本合唱講習会 5/4(水・祝)～5/5(木・祝)
西日本郷土講習会 5/7(土)～5/8(日)
中日本合唱講習会 5/7(土)～5/8(日)
全国指揮・合唱指導講習会 6/17(金)～6/19(日)

◆2021年度表彰団体・個人一覧

表彰団体

【全国協・年間優秀団体】

☆最優秀団体

●広島のうたごえ協議会(広島)

☆優秀団体

●愛知のうたごえ協議会(愛知)

●大阪のうたごえ協議会(大阪)

●福井のうたごえ協議会(福井)

【うたごえ新聞】

☆ブルーペン賞

●藤村記一郎(愛知のうたごえ協議会)

☆編集協力賞

●箱崎作次(東京・三多摩青年合唱団、三多摩教職員合唱団)

☆通信賞

●竹澤まみ(東京・三多摩青年合唱団)

●深澤京子(神奈川・藤沢合唱団)

●岡村朋子(宮城・みやぎ紫金草合唱団)

- 埜 治子（千葉・合唱団プリマベラ）
- 山口直子（福井・福井センター合唱団）

☆機関紙誌賞

- 「竜頭蛇尾」（福井・福井センター合唱団）
- 「マルチャ」（北海道・北海道合唱団）
- 「くれっせんど」（大阪・関西合唱団）

☆読者拡大賞（団体）

- 福井センター合唱団（福井）
- 大阪支局（大阪）
- 島根うたごえ協議会（島根）
- うたごえ・つばき（島根）
- 埼玉東部合唱団レインボー（埼玉）
- 神奈川支局（神奈川）

☆読者拡大賞（個人）

- 藤村記一郎（愛知・愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団）
- 西本好道（兵庫・東播センター合唱団）
- 遠藤譲（埼玉・埼玉合唱団）
- 壬生明美（埼玉・埼玉東部合唱団レインボー）
- 横田静（神奈川・野ばら合唱団）
- 河野好行（神奈川・神奈川合唱団）
- 中里潤子（東京・港区新婦人コーラス）
- 箱崎作次（東京・三多摩青年合唱団、三多摩教職員合唱団）
- 西村容子（島根・島根うたごえ協議会・島根分局）
- 松島正行（大阪・北部センター合唱団）
- 新保正秋（大阪・大阪北部センター合唱団応援団）

- 大東正子（大阪・交野うたう会）
- 鈴木勝雄（東京・調布狛江合唱団）
- 小嶋かほる（広島・ハミングバード）
- 馬場功（滋賀・滋賀のうたごえ）

【音楽センター】

☆ゴールデンディスク賞

- 宮城のうたごえ協議会
- 山形のうたごえ連絡会

◆2021年入退会団体

入会団体

- 和太鼓ドン(京都)
- 一宮うたごえサークル tomorrow(愛知)
- 音アウニシンガーズ(北海道)
- うたごえ・つばき(島根)
- うたごえサークル 陽だまり(島根)
- うたごえおうち(島根)
- たんぽぽ(島根)
- ふくい年金者合唱団「夜明け」(福井)
- スキップ(大阪)

退会団体

- アコーデイオンサークルレインボーズ(静岡)
- 徳島うたごえ「くろわっさん」(徳島)
- うたごえ・なん(神奈川)
- 合唱団ポケット(京都)
- 大阪市保母サークル なのはな(大阪)
- 野の花合唱団(大阪)
- サークルふうせん(新潟)
- 諫早母さんコーラス「樹」(長崎)